

3

私立学校における「生きる力」を育む授業経営

大森隆實（日本私学教育研究所 専任研究員）

1. 本研究の目的と内容

学校教育において何が大事か、という問いに対して、授業という答えが現場の教師から返ってくる。果たして授業とは何なのか、よく考えてみる必要があるだろう。児童、教師、教材があって授業は成立するという。それだけで、十分なのだろうか。教師が一方的に情報を伝えるだけであるならば、一冊の書籍があれば、それで充分事足りるであろう。

教師は児童との関わりの中で、教材の持つ内容の論理をしっかりと全うさせながら、1単位時間ごとの目標に到達できるよう、計画的に授業を展開させなければならない。

児童が登校してから下校するまで一番多くの時間を費やすのは教室であり、そこで行われるのが、授業である。単にページをめくるだけではなく、授業のねらいを児童自身に分からせ、学んで得られる力、すなわち学力が身につくよう導かなければ授業とはいえないだろう。

そのような中で、昨今新しい時代に対応した教育のあり方が考え始められている。知識基盤社会におけるそれである。言うまでもなく模倣、記憶にとどまらず、思考、判断、表現といった様々な能力が求められているのである。

そこで、今回は授業にスポットをあてて、より効果のある、分かりやすい、児童自身が進んで参加できる授業のあり方を考え、表記のテーマを設定した。研究を始める1月前、不幸にも東日本大震災が起き、その対応に対しても様々な評価が出始めている。

児童を導く教師の対応はもちろんのこと、児童自身の判断をとまなう経験、知識によっても結果が異なってくるのが分かった。言われたことを実行したり指示されることを待つだけでは足りないのである。一人ひとりが場に応じて判断できるよう教育現場に求められているのである。

今回の研究はそのあたりも念頭に置きながら進めていきたいと考えている。

2. 生きる力が求められている背景

中央教育審議会答申(平成20年1月17日)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の中で次のように、記述されている。(次ページ参照)

東日本大震災における児童の安全な誘導においても、「生きる力」を学校や、教師のとらえ方によって結果が異なることが分かってきた。文字通り生死を分ける判断が求められる場面での確かな行動がとれるか、大きな責任がそこにあるのである。同じことが児童にも求められているといっても過言でない。経験の少ない児童だからこそ、「生きる力」に掲げられる3つの理念を大事に学ぶ必要が生じてくるのである。

「生きる力」の育成が必要とされる背景

新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」の時代

- 知識基盤社会においては「課題を見だし解決する力」、「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」、「他者や社会、自然や環境と共に生きること」など、変化に対応するための能力が求められる
- このような時代を担う子どもたちに必要な能力こそ「生きる力」
- OECD が知識基盤社会に必要な能力として定義した「主要能力（キーコンピテンシー）」を先取りした考え方

教育基本法・学校教育法の改正において、教育の目標・義務教育の目標が定められるとともに、学力の重要な3つの要素を明確化

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 学習意欲

国内外の学力調査などから、「生きる力」で重視している事項に課題

- 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題
- 読解力で成績分布の分散が拡大、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題
- 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下

理念を実現するためのこれまでの手立てに5つの課題

課題[1] 「生きる力」の意味や必要性について、文部科学省による趣旨の周知・徹底が必ずしも十分ではなく、学校関係者・保護者・社会との間に十分な共通理解がなされなかったこと

課題[2] 子どもの自主性を尊重する余り、教師が指導を躊躇する状況があったのではないかと指摘されていること

課題[3] 各教科における知識・技能を活用する学習活動が十分ではなかったことから、各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間での課題解決的な学習や探究活動との間の段階的なつながりが乏しくなっていること

課題[4] 各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験、レポートの作成、論述といった知識・技能を活用する学習活動を行うためには、現在の授業時数は十分ではないこと

課題[5] 豊かな心や健やかな体の育成について、家庭や地域の教育力が低下したことを踏まえた対応が十分ではなかったこと

(中教審答申「生きる力」平成20年1月17日から)

これらのことを踏まえて、学びにおける基礎基本を着実に身につけるとともに、いかに社会が変化しようとして、自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が求められているのである。さらには豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力を培うことが望まれているのである。

3. 学級経営における教師のあり方

授業は、学級という集団を対象として行うことが原則である。近年、個を大切にしたい授業が求められているが、教育のねらいがあくまでも個の成長にあるので、それは当然なことといえる。しかし、通常は、一斉指導を通して、個の成長を促すことになる。マンツーマンの時間を多く取ることで、個を大切にするとといった考え方は、安易すぎるといっても過言でない。たとえマンツーマンの指導であっても、そのことを通して学級にいる他の人の学びにならなければならないと考えたい。したが

って、学級の状態が授業の成功の鍵を握っているといえるのである。

物的な面と、精神的な面での望ましいクラス作り、学級経営は、単に教室の環境面にとどまらず、クラス集団の一員としての資質を養い、友情・協力・寛容など、子どもたちによって自らが望ましい学級を作るのだという意識を高めるところまで、経営がなされれば幸いである。

学級を受け持つにあたり、次の4点について留意したい。

1. 一人ひとりがクラスの中で、欠くことのできない存在であると感じるよう、教師は努めなければならない。そのことによって、それぞれの人格が尊重され、いじめや仲間はずれも存在しなくなることを期待される。
2. 教師は、子どもたちに等距離で接することが望まれる。低学年ほど、物理的に、高学年になれば精神的に一人の人として認められることで十分である。いずれの場合でも、自分が教師から大事にされていると感じるような関わり方が重要である。
3. 子どもたちが登校してから下校するまで、クラスにすることが安心で、いつも喜びのある場でありたい。
4. 教室内で行われることすべてが教師の責任の下にあり、その際、特に、子どもとの信頼関係が十分できていなければならない。

4. 生きる力を育む授業経営

中教審の副会長であった梶田勲一氏が「たくましい人間教育」の中で次のように述べている。

「子どもはほっておけば自然に学び方が身につくというものでもない。やはり、誰かが教えたり、指導したりしてやらないといけない。中略 子どもには足りない面がある。だからこそ教師は大きな『ねがい』をもって、また、具体的な『ねらい』をもって教師の目から見て足りないと思うところ、指導すれば何とか伸びそうに思われるところを一つ一つ見つめ、手を差し伸べていこうではないかという教育観が出てくる。」

梶田氏の主張する考え方こそ、生きる力を育む授業のあり方に他ならない。先に述べた通り授業は児童、教師、教材によって成り立つのであるが、授業者である教師が計画的に準備しなければならない。教材の指導書をそのまま実践しても生きる力を育む授業にはならないだろう。

目の前にいる子どもたちのことを考えて、また、教材を十分に研究してはじめて、授業の準備ができるのである。

教材化——指導計画を具現化するのが授業である。その中心になるのが目標である。「ねらい」といってもいいだろう。一般に、黒板には、授業のはじめに単元名が書かれ、こういう授業が行われるのだという目安が示される。バスの乗客は、行き先を見て乗車するのが普通である。まれにミステリーツアーといって、到着した時点で目的地が分かることがあるが、いずれの場合でも運転手は行き先を知っているのである。

授業も、子どもたちを乗せたバスのように、教師は何を目標として授業を進めるか、どういう停留所を経て時間を考えながら進めるか、乗客である子どもたちが納得いくように配慮したいものだ。気がついたら誰も乗せないで走っていたり、途中でみんな降りてしまったりすることがな

いよう研究し、計画を立てることが大事である。授業者が授業をする上で最も大切で、時間をかけて準備しなければならないことが教材化である。教材化するのに考えなければならないことに児童観、教材観がある。それについて考えてみたい。

児童観——授業者はテレビに向かって授業を行うのではなく、あくまでもクラスという単位で、日頃教育活動を共にしている子どもたちを対象に行うのであるから、教材化の中でも児童観は、大きな比重を占めていると考えられる。授業がスムーズに展開されるか否かの鍵を握っていると見える。児童観はクラスの児童の構成や傾向にとどまらず、それぞれの授業を進める上で、どこまでが何パーセントくらい理解できているか、教科としてのどのような学習経験を持っているのか、どのくらいの子どもが苦手意識を持っているのか等々、教科の計画を立てる上で配慮しなければならない事項である。だから、本時はこのように展開しようということになる。

教材観——目標達成のために、多くの教材があるが、その中でも教科書が授業を進める上で、その中心になる。教科書はあくまでも教材である。この教材を児童観に基づいて教材化していく必要がある。授業者がこの教材をどのように捉え、それを児童に噛み砕いて提示し、彼らに学ぼうとする意欲を促すように導く必要がある。そのためには、教材を何回も何回も読み、教材の持つ内容の論理を理解すること等、教師自身の教材研究が肝要である。

単元には、いくつかの目標が掲げられているが、その中でもこの子どもたちには、ぜひ身に着けて欲しいねらいが見えてくることだろう。また、ここを理解して欲しいといった目標もあるに違いない。子どもたちが楽しく、進んで積極的に参加することができる授業にするため教師はしっかりと教材観を持って欲しいものだ。

5. まとめ（授業経営の成功をねがって）

新しい世紀に入り、学校には、特に安心、安全が求められている。さき行き不透明な毎日の生活の中で、保護者が自分の子どもにそれを求めるのは当然のことである。今までは、教師に対して、学校に対して遠慮もあつただろうし、信頼も確かにあつた。今日は子どもや保護者に応えることが求められているのである。

この先生の計画した教育活動に参加すれば、子どもに生きる力が身につく、どこに行っても生きて行ける本物の力がつくようになることを望んでいるのである。

いい授業を計画して実践することが、如何に大切か分かるだろう。そのためには教材化に力を注ぐことがキーポイントになる。子どもの真の幸せのために教師は、より、いい授業を求め努力することが、生きる力を育む授業経営になると考える。

6. 参考文献

- ・「たくましい人間教育を一真の自己教育力を育てる」、梶田叡一、金子書房
- ・「生きる力を育む学習指導の実際(小学校)」、大森隆實、教職の充実のための実践講座、pp115-143、朝日出版社(2011)
- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領等の改善について」、文部科学省
- ・中央教育審議会答申「生きる力」、文部科学省